

巻頭言

十勝教育研究所運営委員会
委員長

笹原 敏文

(幕別町教育委員会 教育長)



『学び合う』と『学び和う』

昨年の夏は驚異的な暑さを感じる日々が続ぎ、地球温暖化の影響を改めて実感させられる1年となりました。

そんな暑い夜のお楽しみといえば、冷えた飲み物と少しのおつまみ。ここで、私が食したおつまみについて若干のご紹介。

「しめじとオクラのあえもの」は、それぞれの食材の旨味とポン酢やゴマ油が絶妙に絡み合ったサツパリとした味わいが最高でした。サツパリ系でいえば「トマトと大葉のあえもの」も心に残る一品でした。暑さとは無縁の今の時期にも、お手軽に調理できるひと品として大いにオススメです。

さて、ご紹介した料理に用いた「あ

えもの」という言葉を漢字で表すとどうなるか、皆さん御存じでしょうか。

言わずと知れた、正解は「和え物」。

「合え」ではなく「和え」。

それぞれの漢字についての解説では、「和」は穏やかでちょうどいい状態。一緒にいるけれど、ぶつからない。「合」は2つ以上のものが1か所に集まる。一体感が生み出される。このこと。食材を調理して一緒にするのだから「合え」でもよさそうなものですが、「和え」と表すのは、それぞれの素材のよさを生かした料理の味わい深さを表現しているものと感じます。

この「和」と「合」についての解説

は、ある日の北海道新聞の『朝の食卓』というコラムに掲載されていたものなのですが、授業のありようと関係が深いと感じ入り、私の心に強く残りました。素材のよさを響き合わせる料理の奥深さを考えたときに、この姿勢は授業づくりにも通じるものがあるのではないかと思います。

「主体性を引き出す」や「個に応じる」という文言は各校の研究主題のタイトルでよく目にするものであり、子どもたち一人一人の思いや考えを大切にする姿勢の表れだと感じています。

「個別最適な学び」で一人一人を輝かせ、「協働的な学び」で学校教育の強みである集団での思いや考えを響き合わせる学習を充実させる。皆さん御存じの「令和の日本型学校教育」は、1つの色に染める『合う』ではなく、個が生き生きと共鳴する『和う(あう)』であることが大切だと思います。ここでもう1つ大切に考えたいのは、「学び和う(あう)」場を生み出すのは、

子どもたちが安心して自分の思いや

考えを表せられる支持的風土があってこそ成り立つものだという事です。昨今、各校の取組の中には研究主題の追究とともに、子どもたちの学びの場面での心理的安全性にも着目した「教室風土」や「教室文化」に眼差しを向けたものが見られ、着眼点のすばらしさを感じることがありました。

「個別最適な学び」と「支持的風土」という両輪を大切にすることは、「協働的な学び」の一層の充実を図る上で重要なのではないかと考える今日この頃です。

管内各校では今年度も様々な切り口をもって授業改善を目指した取組が進められてきたことと思います。そうした各校の取組を支える心強い伴走者として、数多くの研修・研究に取り組んでいるのが十勝教育研究所です。これからも各校の先生方が十勝教育研究所と共に、それぞれの取組の充実を図っていただくとことを大いに期待しています。